

ショパンの世界

ポーランドが生んだ偉人と言え、地動説を唱えた天文学者コペルニクス、ノーベル賞を2度も受賞した物理学者キュリー夫人、近年ではローマ法王ヨハネ・パウロ2世と言われる。しかし、今日までポーランド国民の誰からも愛され慕われている人気ダントツは、「ピアノの詩人」と呼ばれた作曲家フレデリック・ショパンを描いていない。

ポーランドの街を歩けば、耳を澄ますとどこからともなく甘美な調べが聞こえてくる。市電の停車場では♪子犬のワルツ♪が聞かれ、特急列車の停車駅では♪ノクターン♪のBGMが流れてくる。国中に溢れるショパンの名曲に国民は夢見心地にさせられるのだ。

20歳でポーランドを離れてから終生母国へ帰ることがなかったショパンの堪えがたい望郷の念を察した姉妹が、遺体はパリ郊外の墓地に埋葬されたが、たつての希望でショパン本人の心臓だけは取り戻し、ワルシャワ市内の聖十字架教会の柱の下に埋葬した。それが今では人気観光スポットのひとつにもなっている。

旅行者の多くは、ポーランドを去る最後の夜をショパンへの想いを膨らませるピアノ演奏に感動し、ショパンに酔いしれてショパンの国に別れを告げる。だが、ワルシャワ空港でもショパンへの想いは断ち切れない。何と空港名まで「ショパン空港」と言うのだ。

かつて♪水色のワルツ♪で知られた作曲家高木東六さんを、横浜市内鶴見のご自宅から藤沢市内のコンサート会場まで車で送迎したことがある。車中で高木さんから、いつか一度はショパンの故郷ポーランドへ行きたいので、その時は案内してもらえないかと何気なく頼まれたことがある。当時社会主義国だったポーランドは極度の財政破綻状態に陥り、デモが頻発して国内は揺れに揺れていた。いずれ国が落ち着いたらご案内しましょうと約束したが、その約束を果たせないまま高木さんは彼岸へ旅立たれた。結局あの話は口約束に終わり、あれほどショパンに思いを寄せていた高木さんの希望を叶えてあげられなかったことが、今も悔やまれてならない。